

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

【研究課題】アジアにおける国境をまたぐ生活スタイルの研究ー東アジア・東南アジア・南アジアの比較を中心に(継続)ー

著者	松本 誠一
雑誌名	アジア文化研究所研究年報
号	51
ページ	436(1)-431(6)
発行年	2017-02-28
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00008498/



【研究課題】 アジアにおける国境をまたぐ 生活スタイルの研究

——東アジア・東南アジア・南アジアの比較を中心に(継続)——

研究代表者：所長 松本誠一

1. 研究の背景と目的

(1) 研究資金

東洋大学では、井上円了記念学術振興基金(The INOUE ENRYO Memorial Grant)により、各種の研究助成・刊行助成、および顕彰などの事業を行っている。本研究は、その中の大型研究特別研究支援を受けて実施するもので、この部門は「研究基盤強化を目的とし、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業等の大型の外部資金の獲得を目指す複数年度(1-2年間)の附置研究所に対する助成」と位置づけられていた。大学附置研究所の研究所長を研究代表者とする研究計画に対して、選考過程を経て採否が決定される研究助成資金である。

アジア文化研究所から2014年に申請した標記課題の研究計画案が採択され、研究期間を2015年4月から2016年3月までの1年間、予算額を3,200千円として開始した。文科省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業は廃止され、平成28年度より私立大学研究ブランディング事業が始められることが予告され、2015年度においてその変更に対応しての申請に至らなかった。科研費基盤Aなどの再びの大型申請を目指して、大型研究特別研究支援の2016年度継続が認められて、予算額は3,600千円とされた。

(2) 研究課題と目標

アジアを含む世界は、グローバル化の進展にともない、国境を越える移動、国境をまたぐ生活が増えてきている。この傾向は顕著である。歴史を振り返ると、民族の生活圏に国境線が引かれてから数十年経っても、国境をはさんで生活圏が保持されている境域もある。たとえば、シンガポール・マレーシア国境では、通勤圏が国境をまたいでいる。中国・ベトナム国境では、近くに住む人々は簡便な出入国手続きで日常的に往来できる。

人々のこういう暮らしの在り様に注目し、われわれはこれまで、東洋大学研究所プロジェクト「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較研究の試みとして」(2007年7月～2008年3月)、「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較研究の定礎に向けて」(2008年4月～2011年3月)「アジア境域における跨境的生活様式の研究——東アジア・東南アジアの比較」(2011年4月～2014年3月)、および科研費(基盤B海外)「トランスナショナル・コミュニティの地域間比較——境域アジアの移住と生活の動態研究」(2009年4月～2012年3月)などによって共同研究を展開してきた。

共同研究のキーワードであるtransnationalの語については、先にオックスフォード英語辞典(OED)の諸用例を参照するなどして、「20世紀前半に使われ始め、当初は多国籍企業や国際法などの事象・領域で用いられていたが、1970年代以降に市民生活、とくに結婚・家族・家事労働などに適用されるようになってきた」としていた。しかし、英語コーパスを基に用例比率の増減をグラ

フ化して示す、Google Books Ngram Viewer（1500年以降の用例が集められている）を参照すると、‘transnational’の使用例は＜1512-1518, 1587-1594, 1828-1834, 1870-1879, 1885以降＞に集められていた。したがって、19世紀以前から使用例はあったと認識を改めたい。

この16世紀の2期間については、保留して言えば、17-19世紀を通じてtransnationalの語の使用例は多くなかった。それが1950年代半ばから使用比率が微増し始め、1960年代以降は急激に増加してきている。1980年代に一時落ち込みは見られるものの、その後も急増傾向を取り戻している。

21世紀に入ってから交通・通信手段の革新が人々の生活スタイルに及ぼした影響は著しい。とくに遠距離移動の高速化は、空は飛行機で、海は高速船で実現し、その利用は大衆化した。遠く離れてもすぐ会いに行ける。電子メール・ネット電話・携帯電話で、遠く別れていても、安く、簡単に、頻繁に連絡しあえるようになった。そして、より重要な変化は、国際クレジットカードの家族カードの普及である。海外にいる家族と生計を共にできるようになった。

世帯を別に分ける、ということの意味が変化していることについて、認識を改める必要があるであろう。それとともに、国民概念、国家行政・経済政策の基本思想も根本から見直していく流れとなるのではないかと思える。グローバル人材は国境をまたぐ生活が身近になっており、そうした事例をマクロ、ミクロの両面から取り上げて、様々な問題を発掘し、比較検討して、理論化を目指すのが、本研究計画の目標である。

2. 研究組織

研究員：植野弘子・小林正夫・後藤武秀・長津一史・バイラビレンドラ・間瀬朋子・

箕曲在弘・山本須美子

客員研究員：井出弘毅・権香淑・鈴木佑記・宮下良子・吉川美華

研究協力者：西野理子

研究支援者：梁凌詩ナンシー

R A：荻翔一

分担役割

総括	松本誠一
汎アジア 統計	西野理子（家族・世帯）・梁凌詩ナンシー
東アジア （韓国） （中国・台湾）	松本誠一・井出弘毅・宮下良子・吉川美華・荻翔一 後藤武秀・権香淑・植野弘子
東南アジア （大陸部） （島嶼部）	箕曲在弘・鈴木佑記 長津一史・間瀬朋子
南アジア	小林正夫・バイラビレンドラ・山本須美子

各分担研究者がそれぞれの研究を進める過程で協力を得ている多くの方々、機関については、それぞれの報告書の中で言及され、謝辞が述べられている。

3. 研究出張経過

2016年4月23日～5月4日 間瀬朋子：インドネシア

2016年8月3日～8月10日 権香淑：中国・韓国

2016年8月16日～8月24日 山本須美子：インド・シンガポール

2016年8月8日～9月5日 バイラ・プラサド・ビレンドラ：ネパール

2016年 8月20日～8月25日 井出弘毅・荻翔一・松本誠一：韓国
 2016年 8月30日～9月13日 箕曲在弘：タイ・ラオス
 2016年 9月1日～9月8日 吉川美華：韓国
 2016年 8月31日～9月2日 後藤武秀：韓国
 2016年11月22日～11月24日 宮下良子：大阪・奈良・三重
 2016年12月23日～12月30日 鈴木佑記：タイ・ミャンマー
 2017年 1月6日～1月8日 間瀬朋子・鈴木佑記：気仙沼

4. 研究集会

研究会

(1) アジア文化研究所「国境をまたぐ生活スタイル」企画 国際結婚移住に関する研究会

開催日時：2016年 5月21日(土) 16:00-17:50

会 場：東洋大学白山キャンパス 6号館 4階6402教室

司 会：松本誠一

趣旨説明：松本誠一

講 師：開内文乃

講師は、山田昌弘・開内文乃『絶食系男子となでしこ姫——国際結婚の現在・過去・未来』(2012 東洋経済新報社)の共著をもつ。

発表題目：『『グローバル・ファミリー』の出現とゆくえ——近代国民国家とグローバル社会をつなぐ家族のあり方』

概 要：

本報告では、「アジア人男性と国際結婚した日本人女性の事例」を対象に、2010～2013年にかけて香港・シンガポール・バンコク・トルコで調査された事例(78人)を通じて、第1パート「グローバル化による日本人女性の国際結婚——インターナショナル型国際結婚とグローバル型国際結婚」、および第2パート「国際結婚した日本人女性の生殖家族形成——家族のコミュニケーションに日本語を選択する事例」が論じられた。

日本人女性のここ20年間の国際結婚数は、日本国内では5000組／年で推移しているのに対し、国外では2倍～3倍へと増加している。講師は「インターナショナル型国際結婚」を「近代国民国家を前提とした国際結婚」と規定し、日本農村の嫁不足を解消しようとした外国人花嫁などを例示し、彼らによる生殖家族を「トランスナショナル・ファミリー」とする。また「グローバル型国際結婚」を「グローバル社会への適応を前提とした国際結婚」と規定し、彼らがなす生殖家族を「グローバル・ファミリー」とする。

日本人女性のグローバル型国際結婚が増えた要因は、結婚前からグローバルに活動し(人的資本が高い)、日本人以外の男性との恋愛結婚が可能なこと(文化資本が高い)にあるとする。

日本人男性の国際結婚については、国内ではアジア人女性との国際結婚は減少し、非アジア人女性との国際結婚は停滞している。「絶食系男子」というのは「肉食系」でなく、といって「草食系」ですらなく、結婚志向のない「絶食系」の日本人男子が増えていることを象徴的に表す。アジア人男性から国際結婚相手として日本人女性の選択評価が高いのに反して、アジア人女性から日本人男性に対する選択評価は低いという。

そして、生殖家族内での言語選択に関して、全78組中「母と子で日本語選択は54組」「父と子で日本語選択は6組」「家族全員で日本語選択は9組」であったことを踏まえて、「日本人女性は複数言語が使用できることを家族形成のメリットと考え、家族のコミュニケーションに積極的に日本語

を使用する傾向がある」と結論付ける。ここに、国際結婚した日本人女性は、彼女が生まれ育った定位家族（親きょうだい）と、自らの国際結婚家族とのつながりを維持しやすくするための言語選択行為が窺われる。そして、講師は「グローバル・ファミリーは妻を介して、グローバル社会と国民国家の両方に接続」とまとめを示した。

われわれの共同研究の目標とするところの一つのイメージが、具体的に描きだされ、示唆される内容の濃い講演であった。

(2) アジア家族・世帯統計研究会

開催日時：2016年6月24日（金） 16：00－19：30

会 場：東洋大学白山キャンパス 6号館4階6402教室

司 会：西野理子（東洋大学社会学部・教授）

趣旨説明：松本誠一

報 告 1：松本誠一

「＜国境をまたぐ繋がり＞調査の新展開に向けて」

報 告 2：梁凌詩ナンシー（東洋大学アジア文化研究所研究支援者）

「アジアにおける国境をまたぐ家族生活の実態調査案」

※報告の2本とも、このときの報告をもとに改稿したものを、研究所資料集『国境をまたぐ生活スタイル——量的研究に向けて』（2017年1月25日刊行）に収載

(3) アジア地域移住労働者関連法制分析—韓国法制研究院との研究交流

開催日時：2016年9月2日（金） 11：00－16：00

会 場：韓国・ソウル駅会議室

報 告：後藤武秀・吉川美華、および韓国法制研究院の研究者
（詳細は後掲、および研究所活動報告）

5. 研究成果の報告

井出弘毅・荻翔一・松本誠一：（後掲）

「日韓境域、とくに韓国南海岸地方、コジェ島を中心とした現地調査」

権香淑・梁凌詩ナンシー：2017年1月21日研究所年次集会で発表

「国境をまたぐ家族の現状と課題—中国における予備調査結果を踏まえて」

権香淑・梁凌詩ナンシー・松本誠一：（別掲）

研究所資料集『国境をまたぐ生活スタイル——量的研究に向けて』（2017年1月25日刊行）

バイラ・プラサド・ビレンドラ：ネパール：2017年1月21日研究所年次集会で報告

「国境を越えた生活がもたらした途上国における変化—バネパ市を事例として」

間瀬朋子：（後掲）

「来日インドネシア人の出身地調査」

間瀬朋子：2017年1月21日研究所年次集会で報告予定

「在気仙沼・インドネシア人水産加工・漁業従事者の社会経済的再統合をめぐる考察」

宮下良子：（後掲）

「アジアにおける国境をまたぐ生活スタイルの研究—東アジア・東南アジア・南アジアの比較を中心に——『在日コリアン寺院』である宝巖寺の薬師霊場巡りへの参加」

山本須美子：（後掲）

「ニューデリー・シンガポール調査報告」

吉川美華：（後掲）

「韓国の外国人労働者関連法調査——知識・ファクト・死角地帯・共感帯のバランスとワールドワイドな制度の波及効果」

吉川美華・後藤武秀：（後掲）

「アジア地域移住労働者関連法制分析——韓国法制研究院とアジア文化研究所の交流活動」

6. その他の研究成果

植野弘子 2016.9. 「婚出女性がつなぐ『家』——台湾漢民族社会における姉妹と娘の役割」, 加藤彰彦・戸石七生・林研三編『家と共同性』, 233-254頁, 日本経済評論社。

植野弘子 2016.10. 「植民地台湾の生活世界の『日本化』とその後——旧南洋群島を視野に入れて」, 三尾裕子・遠藤央・植野弘子編『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』, 145-181頁, 慶應義塾大学出版会。

権 香淑 2016.2. 「移動する朝鮮族と家族の分散——国籍・戸籍取得をめぐる『生きるための工夫』」, 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版

小林正夫 2017.2. Support from Absent Migrants after Earthquake 2015 in Gorkha, Nepal, 『東洋大学アジア文化研究所研究年報』第51号

鈴木佑記 2016.2. 「海民と国境——タイに暮らすモーケン人のビルマとインドへの越境移動」, 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版

間瀬朋子 2016.2. 「民衆生業の社会経済圏——インドネシア・ソロ地方出身のジャムー売りの世界」, 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版

長津一史 2016.2. 「海民の社会空間——東南アジアにみる混淆と共生のかたち」, 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子編著『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』上智大学出版

山本須美子 2016 「在欧文氏一族にみる宗族のつながりの世代的変容」『東洋大学社会学部紀要』第54-1集

山本須美子編 2017.1. 『ヨーロッパにおける移民第二世代の学校適応』明石書店

山本須美子 2017.2. 「在日インド人家族の学校選択を通して見たトランスナショナリズム」『東洋大学アジア文化研究所年報』第51号

7. 今後に向けて

井上記念研究助成大型研究特別研究支援による共同研究は2年までと定められているので、今年度で一区切りをつける。しかし、グローバル化とナショナル、あるいはローカルな動きのダイナミズムは、世界で大きく変動し続けている。2016年にはとくに、英国のEU離脱（Brexit）、アメリカのトランプ現象という歴史的な出来事が起こった。移動するヒトと変化する社会文化を、研究者は観察し、報告を続けていく責務を負う。

サステイナブル（持続可能な）の言葉に対して、経済成長の持続、右肩上がりの発展を期待する向きもあるようだが、1972年にローマクラブが「成長の限界」として警鐘を鳴らしたときの文脈で

理解しなくてはならない。産業革命の辺りからの人口爆発をそのまま維持することはできない。高齢化・少子化による国民の人口急減を食い止めようと、中国は「一人っ子政策」を中止し、出産奨励策を打ち出したりする。しかし、世界人口は全体としては相変わらず急増し続けている。ドイツのように過剰人口を大量に移民として受け入れるのが、多分合理的な選択であろうが、異文化／異なる宗教をもち、そして家族・親族関係の慣行が異なる人々が、ホスト社会に同化せず、ナショナルな文化を持ち込むのであれば、エスニックな葛藤・摩擦の種は大きくなり、社会の安全（social security）は脅かされる。それはまた不安の原因となる。

世界経済の変化の影響を被らず、地域経済の担い手が予測できない外因に左右され続けることから脱却して、ローカル経済の自律性、自立性に価値を置いて、将来を拓こうとする動きも始まっている。「里山資本主義」や、「小規模経済」の試みが注目される。

人口サイズの大きなアジアがどう動いているか。アジアと他の地域との相互関係はどう作用しているか。通訳なしで直接アジア各地の現場で参与観察できる専門家の役割はますます重要なものとして期待される。

さらに、巨大なマーケットとして登場してきているアフリカの動きも、見過ごせない。アフリカでのスマホの普及は、アフリカの人びとの世界経済への参加を爆発的に拡大させている。トランスナショナルな動き、国境をまたぐ生活スタイルの研究は、urgentな課題であり、もう止めるというわけにはいかない。（松本誠一記）